

9月20日愛知県議会本会議での知事提案説明（関連部分抜粋）

8月1日に「あいちトリエンナーレ2019」が開幕し、会期の約3分の2が経過しました。「情の時代」をテーマに、最先端の芸術作品を名古屋市内、豊田市内において展開し、9月19日までに約40万人もの多くの方々にご来場いただいております。前回の同時期に比べて2割増のペースであります。

「あいちトリエンナーレ2019」の企画の一つである「表現の不自由展・その後」の展示に関しましては、開幕以降、電話やファックス、メールなどにより、多くのご意見をいただきました。また、その中にはテロや犯行を予告するものもございました。これらがさらにエスカレートしますと、県民の皆様が安全・安心に芸術祭を楽しんでいただくことができなくなると危惧され、津田芸術監督や表現の不自由展実行委員会とも相談し、津田監督とも合意のうえで、8月4日から展示を中止させていただいたところであります。

また、これを受け、あいちトリエンナーレのあり方については、県民の皆様から様々な観点でのご意見をいただきました。そこで、会期中ではありますが、「表現の不自由展・その後」に関する一連の経緯等を検証し、今後の芸術祭のあり方を提言いただく趣旨で「あいちトリエンナーレのあり方検証委員会」を設置し、8月16日に第1回会議を開催いたしました。

9月17日に開かれた第2回会議では、合計26人への精力的なヒアリングを踏まえて、事実関係を検証し、「これまでの調査からわかったこと」という資料1をとりまとめ、各委員が分担して説明されました。その中の「4 事実関係の整理とヒアリングからわかったこと」という部分（P42）では「表現の不自由展・その後」の作家と作品キュレーション体制について、このような指摘がありました。これによりますと、

- 1 芸術監督と不自由展実行委員会で作品を選定。
- 2 大浦氏の新作映像作品の存在は、直前まで事務局にもキュレーターチームにも知らされていなかった。
- 3 企画段階から、キュレーターチームの参画はほとんどなかった。
- 4 不自由展には、担当キュレーターはあてられなかったため、専門キュレーターによるキュレーションはなされなかった。
- 5 芸術監督は自分で推した4人の作家と直接準備のためのやりとりをしていた。
- 6 不自由展実行委員会と作家の間の取り決め連絡等は、必ずしも円滑ではなかった

と思われる。(作家等へのインタビューによる)
ということでありました。即ち、少女像と並んで問題とされた大浦氏の新作映像作品の存在は、県庁には事前に一切協議・相談が無く、言わば勝手に持ちこまれたとも言えるもので、県庁職員が映像内容を確認したのは、作品が現場に設置された内覧会の前日の7月30日でした。

また、会長である私がネット上で一部画面を断片的に確認したのが、展示を中止した後の8月4日(P44)でありました。

また、県との関係については、P43、P45、P55、P56に記載があります。
即ち、

- 1 会長としては、これまで3回のトリエンナーレと同様に、企画展示の内容については極力専門家である芸術監督に委ねるべきと考えていた。さらに、知事としても、金は出すが口は出すべきでないと考え、また、憲法上の「検閲」にあたるような行為はよくないと考えていた。
 - 2 ただし、会長として、少女像の実物展示があることについては、安全上の危惧をし、芸術監督に対し、「少女像は何とかならないか、やめてくれないか」、「少女像は、実物ではなくパネルにならないか」、「写真撮影は禁止にできないのか」といった懸念を伝えた。(6月20日)
 - 3 しかし、不自由展実行委員会側には、少女像の展示はするという強い意向があったので、芸術監督は、写真撮影禁止、又は入口付近からの写真撮影のみ許可し、SNSへの掲載禁止で対処する意向を事務局経由で会長へ伝えた。(7月8日)
 - 4 会長は、事務局を通じて、芸術監督に対し、再度少女像展示はやめてもらえるよう考え直してくれないかと伝えるとともに、写真撮影禁止とSNS投稿禁止を、芸術監督と不自由展実行委員会の連名で掲示するよう協議を指示した。(7月11日)
 - 5 これに対し、不自由展実行委員会は、写真撮影は禁止できないが、SNS投稿禁止については、あいちトリエンナーレ実行委員会、芸術監督、不自由展実行委員会の3者連名で掲示することを了承した。(7月19日)
- ・ 会長は、先述のとおり、何度も見直しを提案した。しかし、政治家であるため、検閲にならないよう留意した。

ということでありました。

ちなみに、資料2で京都大学教授で憲法が御専門の曾我部教授は、会長である私から芸術監督への一連の要請は、芸術活動の自律性を尊重した上で、危機管理のために例外的介入をしたものであり、検閲には当たらないと位置付けられました。

そして、その上で、資料6「今後の作業に向けて」という論点整理メモもまとめていただきました。そこには、「これまでのまとめ」として、

- 1 当初の2日間、不自由展の会場内は、比較的平穏だった。しかし、SNSによる画像拡散等によって、深刻な電凸や脅迫等につながった。
- 2 脅迫等による安全上の理由からやむなく中止したが、海外アーティスト等は、広義の検閲と考えており、再開しない場合は、今後のあいちトリエンナーレへの出品ボイコット等につながりかねない。
- 3 また、今回の事案は、各地の美術館やメディア等に無意識のうちの自主規制や、いわゆる「内なる検閲」を広めかねないリスクをはらむ。
- 4 なお、今回の展示に対する批判は、主に「平和の少女像」及び大浦氏、中垣氏の作品に対するものだった。また、特に公立美術館で展示することの妥当性に関する抗議もあった。
- 5 しかし、いずれの作品も専門家によるキュレーションと丁寧な作品解説、そして適切な展示方法がとられることによって、より理解を得られ、より安全に展示しえたと思われる。

とあり、また、「今後の検討課題」として、

- 6 5の状況が確保できなかった背景には、準備の時間の乏しさ、企画段階からのキュレーターチームの不参加、芸術監督への権限の集中（あるいは芸術監督に対する牽制、チェック体制の不備）、出品作家とのやりとりを含む交渉体制の不備等様々な要因があったと思われるが、さらに検証が必要。
- 7 再び、こうした事態を招かないためには、あいちトリエンナーレのガバナンスのあり方を見直す必要がある。
 - －会長を補佐する体制の検討
 - －芸術祭にも『アーツカウンシル』等の仕組みを導入すべき
- 8 また、県立美術館としての主体的な表現の自由の権利を具体的に保障する仕組みも今後の検討課題。

と整理されております。

検証委員会は、今後も、引き続き、作家の皆さんや芸術監督の選考委員会の関係者等へのヒアリングや各種アンケート等を行い、9月25日の委員会では中間報告をまとめていただく予定と聞いております。私どもは、そうした検証委員会のとりまとめを真摯に受け止めて、今後の対応を適切に検討していきたいと考えております。

また、検証委員会は、明日21日に「表現の自由に関する国内フォーラム」で、作

家やキュレーター、県民の皆様のご意見を聞く予定と聞いております。さらに10月には、あいちトリエンナーレで展示中止とした作家や、こうした問題に精通する海外ジャーナリストを招いて「表現の自由に関する国際フォーラム（仮称）」を開催し、表現の自由の実現に向けてアートができることを確認し、表現の自由に関する新しいルールを模索します。そして、できれば各国政府や世界の人々に対して、表現の自由を守るための「あいち宣言（あいちプロトコル）」を提案したいと考えております。

「あいちトリエンナーレ2019」は、10月14日まで開催されております。残りの会期につきましても、引き続き安全・安心な運営に努めてまいりますので、多くの方々に最先端の芸術作品を楽しんでいただきたいと思います。